

『量子力学と手技療法はどの様につながるのか？』

渡部 靖彦

引用・出典

- ◆ソモト・エモーショナル・リリース 体性・感情・解放とその向こう
ジョン・E．アプレジャー（著） 129～131頁

II. 量子物理学との関係

量子物理学は1900年にマックス・プランクによって種を蒔かれ、伸びてきたものだ。プランクは量子論をその頃に提唱し、“物理世界には純粋連続体というようなものは存在しない”という概念を出した。エネルギー、運動、質量は全て微分子や量子として存在する。こういった量子はとても小さいので、連続しているような外観を呈しているが、微詳細をよく調べてみると、全てのものは、運動でさえも小片から成り立っている。例えば振子は連続体ではエネルギーを得ることも失うこともできない。それはプランクが量子と名付けた不連続の量内でエネルギーを得たり失ったりする。各量子はそれぞれが特定の量のエネルギーを有していると考えられている。電磁気放射で見ると量子は光子である。1905年にアインシュタインはプランクの量子論を使って光電子効果を説明した。1913年にはボーがプランクの論を使って原子スペクトルを説明した。そして1933年にはアーウィン・シュレーディンガーが、今日にみる量子物理学を生むことになる波動方程式を展開した功でノーベル賞を受けた。量子力学こそ、電子と微分子行動を描写する科学だ。量子電気力学はそれをさらに広げて、量場における充電された分子の行動を扱うものだ。電子と陽電子と発光間の相互作用を説明するために使われたものだ。全ての量子科学は量子論を公式化したマックス・プランクの洞察の結果に負う。ところで量子論や量子力学は、イメージや対話とどんな関係があるのだろうか。

1960年から1964年を通して私は教鞭 & 特別研究員としてステイシー・F.ハウエルという大変明晰な人のもとで働けるといふ非常な幸運に恵まれた。ハウエル博士は生化学者で、私が彼の最初で唯一人の特別研究員だった。引退間近だったので、今までに発明したたくさんのアイデアや考えを披露すべく、彼は私を“共鳴板”として使った。ハウエル博士はサイズに関するばく大な量の手書きのノートを持っていた。「一つの分子はミニチュア模型の銀河に例えられ、惑星が太陽を廻っているのと類似して、原子核は電子を持った太陽のミニ模型に例えられるかもしれない」と提唱した。さらに彼は、「こういった類似した関係というのは、サイズが違うだけで全ての物の間に存在する」と提唱した。「分子はかけらではあるが、そのかけらは総てを含むホログラムである」というものだ。彼はこの主題について私に何時間ものあいだレクチャーした。「細胞というのはミニ人間で、電子は地球が太陽の周りを廻るようにその核の周りを廻るミニ地球だ」というように。

我々の想像をもう少し広げてみると、「人間や心や想像やイメージは電子とは同類関係ではないか」という可能性も考えられる。テレビジョン・セットのように、電子が電子ガンから発射されるときには、分子としても、波としてもどちらでも振るまえるように思われる。電子が分子として動くのか、あるいは波として動くのかは、我々がどういう方法でそれを観察するかによっているようだ。スリットを通して電子を霧箱の中に発射すると、それらは分子のように振るまうように思われる。つまり、それらは箱の中で霧の中を動いて、人間の目に見える軌跡を残す。他方、もし電子を同じスリットから写真のフィルムに向かって放射すれば、波がフィルムを打っているのが結果として出るだろう。

電子は分子か波かという議論がそれなのだ。

この電子の性質に関する明らかな矛盾に関して理論好きな物理学者は「電子は我々がどう観察するかによって、分子にも波にもなるのではないか」という疑問を定義した。次の質問は「もし観察者がいなければ電子は分子として動くか、または波として動くのか、それともどちらでもないのか」というものだ。もしかして電子は、我々が理解する必要があることや、我々が当惑していることを知っているのかもしれない。我々に適応しようとしているのかもしれない。だから、もし私達が分子を探そうと決心すれば、電子は分子のように振る舞う。あるいはもし波を探せば、波を出してくる、というように。時に電子が茶目つけを出したり、機嫌が悪かったりすると、我々が期待しているのと反対のことをするのもかもしれない。かなり頻繁にそういうときがあるようだが。ある実験者は他の人と反対の結果を得たりする。電子はミニ人間なんだろうか。ある人はあなたが見たいものを見せてくれるし、他の人は反対で、あなたの見たいのとちょうど反対のものを見せてくれるようなものだ。

もし電子が実験者が望むように、実験者のために演じているのだったら、何も実験が行われていないときに電子は何をしているのだろうか。

誰も見ていないときの電子行動現象などあるのだろうか。あるいは見る人がいるときだけこの行動が起こるのだろうか。

あなたの手が何かを知覚したとして、あなたの手がまだそこにもその何かは存在していたのだろうか。今まで、多くのセラピストが私に「新しいリズムを感覚したとか、新しいベクトルを見た」とか報告してきた。それは驚くことでもあり、また同時に何ともないことだ。こういったリズムやベクトルは、セラピストがいなくてもそこにあるものなのだろうか？こういうと私達はハンズ・オン(手当)セラピストとして、ものをただ想像しているだけののように聞こえたり、“感覚の信頼性”に反したケース作りをしだしているかのよう聞こえるかもしれないが、そうではないのだ。次にもっとびっくりすることなのだが、こういった“想像のリズムやベクトル”を使った治療がしばしば積極的な効果を得、成功しているということだ。1989年の春のこと、こういった疑問について討論していたとき、クラスの参加者の一人が経験を述べた。彼女は私が示したやり方でベクトル／軸システムを使ったり、見るのに四苦八苦していた。彼女はオープンで、自由で、創造的なタイプだったので、自分のベクトル／軸を考え出したのだ。彼女は自分の目的に合うようにベクトルを創案した。本人の想像した／創案した／即興のベクトルは、彼女にとっても彼女の患者にとっても効果的だった！ポジティブ(明確な)な治療結果が得られた。彼女は「この同じやり方を何度も患者に試して非常に高い成功度をおさめてきた」といっている。私は彼女のいうことを信じている。

患者を診るときには、自分が期待していたような結果を得るかもしれないし、まったく反対の結果になるかもしれない。“つむじまがりの電子”があるかもしれないように、私達に対して逆の反応を返す人を治療するかもしれないのだ。頭蓋仙骨リズムを感じるつもりになっていれば、それを感じるだろう。頭蓋仙骨系は治療効果に積極的に従う、と予期していればそうなるだろう(つむじ曲りの反応は除いて)。

「患者が真実にこうなって欲しい」というイメージをお互いに得ることができれば、私達の願いは叶えられる。電子も、人も同じであるかもしれないが、我々がそれを知覚したときそれが現実になる。

もしこれが本当だとすれば、「私達が何かを想像したときにはそれを現実化することができる」わけだ。対話の伴った治療イメージというのは、それが正確に使われたとき非常な効果を表す治療様式だ。これが量子物理学が関係しているという所以なのだ。